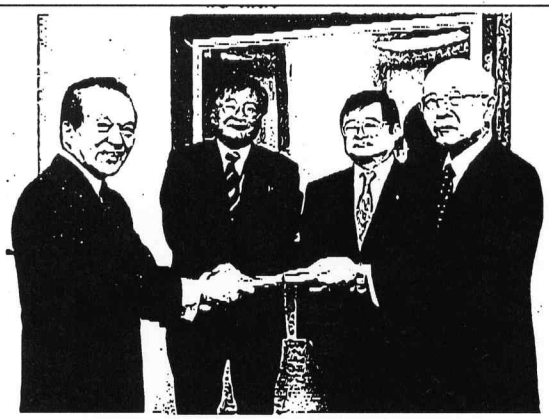
民報 (第三種郵便物認可)

福島民報社、事業団が500万円

福医大災害医療講座に寄付

福島民報社と福島民報厚生文化事業団（理事長・花田昂福島民報社取締役相談役）は二十七日、福島医大が四月に開設する災害医療支援講座に五百万円を寄付した。同講座への寄付は初めてで、同大は広く協力を呼び掛けている。



菊地理事長兼学長に寄付金を手渡す渡部社長（右）。左から2人目は梅津理事、右隣は佐藤監査役

贈呈式は福島市の同大で行われた。福島民報社の渡部世一社長が「福島医大は積極的に災害医療に取り組んでおり、県民の期待は大きい。今後、多くの寄付が集まることを願っている」とあいさつし、菊地臣一理事長兼学長に寄付金を手渡した。菊地理事長は「国、県の支援にも限りがあり、大変ありがたい。前例のない取り組みだが、被災地医療の新しいモデルをつくりたい」と述べた。寄付金の内訳は福島民報社が三百万円、事業団が二百万円。

福島民報厚生文化事業団事務局長の佐藤晴雄福島民報社監査役、同大の梅津茂己理事が同席した。

災害医療支援講座は東日本大震災以降、危機的な状況にある相双地区に医師派遣などをするために設ける。当初は相馬、南相馬両市の病院に八人を派遣する。講座は医師を県外から募る際の受け皿となるほか、災害医療や被災地医療ニーズについての研究をする。設置期間は四年。

運営費は県内外の企業からの寄付で賄い、年間一千万～千五百万円が必要とみている。医師の人件費は別に、県が基金から拠出する。

講座が実施する医師確保の取り組みに協力した相馬市の立谷秀清市長は「今回の寄付をきっかけとして、さらに支援の輪が広がり、被災地の医療環境の充実につながることを期待する」と話している。

民俗紹介

4年度事業

10月から「飯舘展」

県歴史資料館

各種施設で紹介する。地域の思いを共有し、心の復興を進める。

福島市の県歴史資料館では、全村避難となった飯舘村（二本松市、川俣町、飯舘村）から同館に寄託された「飯舘村の歴史と風土」（仮称）を十～十二月に開催する。

どに選び出された古文書、考古資料、祭事道具などを展示する「飯舘村の歴史と風土」（仮称）を十～十二月に開催する。住民が集まる場にもしたい」とする。来年三月から二十五年度にかけては被災地にあった貴重な資料を展示する「災害をこえて―救出された歴史資料―」（仮称）を開く。

県総合美術展覧会（県展）は十二月七～十六日に福島市の県文化センターで開く。同センターでは九月二十九日～十一月四日に福島民報社創刊百二十周年記念事業「地上の天宮 北京・故宮博物院展」が開催される。

福島市の福島ビューホテルで二十七日に開いた理事会で二十四年度の事業計画を決めた。事業団と県文化振興基金の合併や経営計画の改定なども決めた。三月末で退任する富田孝志理事長が「長期的な視点で震災からの文化復興を考えよう」とあいさつした。後任には県教育長を退く遠藤俊博氏が四月一日付で就く。

任期満了 員九人を 期は四 年。石河 る。評議 五十嵐 歴田弘訓、 田修、崇 織、馬目

県内全地域で減

21年度市町村内総生産、住民所得

リーマン・ショック

県は二十七日、平成二十一年度の県市町村民経済計算を発表した。市町村内総生産、市町村民所得、一人当たり市町村民所得のいずれの項目も県北、県中、県南、会津、南会津、相双、いわきの県内全地域で減少した。三項目とも全域でマイナス成長となるのは平成十三年以来。県は「二十一年度当時はリーマン・ショック造業の打 れた」とし 市町村 総生産は 市町村内 総生産（

平成21年度の市町村内総生産と対前年度増減率

市町村名	市町村内総生産（百万円）	対前年度増減率（%）
福島市	1,110,897	▲ 1.9
二本松市	154,728	▲ 9.6
伊達市	161,404	▲ 1.5
本宮市	188,772	10.0
桑折町	41,311	▲ 3.7
国見町	26,496	▲ 4.0
川俣町	35,767	▲ 6.5
大玉村	20,697	2.6
郡山市	1,302,242	▲ 4.9
須賀川市	225,382	▲ 0.6
田村市	98,130	▲ 4.2
鏡石町	38,448	▲ 4.4
天栄村	19,679	2.4
石川町	43,845	▲ 8.6
玉川村	33,208	▲ 3.0
平田村	20,210	3.3
浅川町	15,403	▲12.5
古殿町	15,939	3.6
三春町	41,115	▲13.2
小野町	28,109	▲ 6.2